

ジョイスと Communion の問題

吉 津 成 久

1904年ジョイスは『姉妹』(The Sisters)という、後に『ダブリンの人々』(Dubliners)という十五篇から成る短篇小説集の冒頭に載ることになる作品を書いた。またこの年には、『肖像』の初稿ともいえる作品を書いている。この『姉妹』は、『肖像』およびその後の作品とのかかわりと共に、ジョイス文学の出発点として最大の興味を呼ぶものである。

ジョイスは『姉妹』の初稿を書いた直後、友人カランに宛てて『ダブリン市民』に載せる短篇集の計画を語っている。

「私は今一連の祈願の書 (epicleti) —10からなる— を書いています。私は今そのうちの一つを書き終えました。私はこのシリーズに『ダブリンの人々』という題をつけようと思います。それは多くの人にある都市を想起させるあの半身不随で中風にかかった魂 (the soul of that hemiplegia or paralysis) を暴露するものです⁽¹⁾。』

epicleti とは、epiclesis = epiklesis [èpiklî:sis] から由来した言葉で神学用語、特に聖体元素を奉納する際の聖霊への祈願で、ギリシャ語の epiklêsis = invocation by name (epi=上へ+kaleân=to call) の意味をもっている言葉。尚 invocation には、神への祈願、詩のはじめの詩神の靈感をひる言葉 (ギリシャ叙事詩の慣例)、悪魔を呼び出す呪文、まじない等々の意味がある。しかし、この場合の祈願は、カソリックのミサの形式という枠組においてなされる祈願ということを考慮しなければならない。ミサの形式は次のようである。

ミサのはじまりを告げる聖歌 (入祭文) がうたわれる。司祭は祭壇の下で準備の祈りを唱えてから祭壇にあがる。そして祭壇に接吻し、香炉を振

る。香の煙が四方に立ちこめる。この時参会者である信者たちも、洗水盤で十字を切って身を清めて入場する。いわば聖所に入る準備と入場の儀式がなされる。ついで神への礼拝と祈願を求める賛美歌、つまり求禱誦のほか、栄光誦、集禱文、聖書の書簡、昇階誦、詠誦、福音書といったものが唱えられる。ついで信者が献物を神に捧げる。かつて中世では信者たちはパンやブドウ酒、果物、花などといったものを持ちよったというが、現在では司祭の側でそれを準備する。司祭はこの捧げられたパンとブドウ酒に撒香して清め、それをいわゆる聖体拝領 (Communion) のパンとブドウ酒のために準備する。ついで聖なる生贄とよばれる儀式に入る。司祭は捧げられたパンとブドウ酒の上に両手をひろげ、信者を代表して按手する。そして捧げ物のパンとブドウ酒が最後の晩餐のキリストの言葉と同じく、キリストの血であり肉であるよう、聖変化するようにと祈る。こうして按手をすませた象徴的なキリストの身体の前で司祭と参会者は、聖体拝領、つまりキリストの血と肉の宴にあずかる準備をすべてととのえたことになる⁽²⁾。(傍点は筆者による。)

epicleti とは、上の引用中の傍点部を指し、ミサつまりキリストの死(犠牲)によって、その血と肉にあずかることによって、罪を持って生まれた人間の罪があがなわれ、さらに父なる神から子たる人間の内に聖霊が宿ることへの祈願である。つまりそれは、ミサに列席する多くの「子」たる会衆が、彼らの魂の「父」であり、また神からすれば「みどり子の如く罪なきものとして選ばれた⁽³⁾」司祭を仲介として、より大いなる全能の「父」たる神との一体化を求める祈願である。この一体化が成立するには神—司祭——会衆というカソリックの体系に不信とか地位の逆転(会衆が司祭の権能を私物化し直接神との Communion を行う)があってはならない。聖職交換 (simony) は許されざる罪でありカソリック体系の存在そのものの崩壊である。したがって司祭が、唯一度の品級の秘蹟 (the sacrament of Holy Orders) を受けることによってゆるぎない権能を与えられる必要がある。『肖像』第四章においてスティーヴンは大学を去るにあたり校長から司祭になることをすすめられる。校長は司祭の権能を次のように

説明する。

「そのお召しを受けることはスティーヴン、神が人間に与える最大の榮譽なのだよ。この地上の国王も皇帝も神の司祭のもつような権力もっていない。天国の天使も大天使も、聖者も、いや処女マリアさえも、神の司祭のもつ権力をもっていない。鍵の権能 (the power of the keys, マタイ伝 16・19)、罪を縛り、罪から解きはなつ権力、悪魔を払う力、神の造りたもうたものから、その上に力を振る悪霊を追い出す力、天の偉大なる神を祭壇に下し、パンと葡萄酒の形をとらしめる力、権能。何という恐ろしい力だろう、スティーヴン⁽⁴⁾。」(傍点は筆者による。)

司祭の権能の中に告解の聴聞という重要なものがある。この告解とは洗礼によって入信し、それによって原罪をあがなわれた信者が洗礼以後に犯した罪の許しを得るための秘跡であり、一度、洗礼によって原罪の許しを得ていながら、人間は弱い存在であるため、繰り返えし罪を犯し、掟を破る。したがって、洗礼と堅信礼の秘跡が一回かぎりのものであるのに対して、この告解の秘跡は繰り返えし行なわれるものとなる。しかしこの告解の聴聞においてこそ司祭も一人の弱い人間であるという事実が問題になる。告白する側の心理としてこれは当然考えられうることである。

「神に向って告白し、懺悔するのと、たとえ神への仲介者たる司祭であれ、人に告白するのとでは違いがあるはずである。司祭は、その告白内容を他にもらすことはかたく禁じられているにしても、告白するものの心理的不安はやはりその相手が人であるだけに残るにちがいない。自分の内なる秘密を一人の司祭が知っているということが、その人を教会から離れがたくすることもあろうし、また教会を不安な力として感じさせることもあるだろう。ただもし、その信者が司祭を完全に信頼し、司祭もそれにこたえうる人であるなら、その告解は信者の心を浄化し、そこに一つの人格的交流の絆が結ばれることであろう⁽⁵⁾。」

みどり子の如く罪なきものとして選ばれた神に最も近い聖なる存在であると同時に卑俗の世界に住む自分と同じ弱い人間ではないかという司祭に対する信者の不安は、時としてむしろそうあって欲しいという期待に変質

する場合があるようである。これは、この世のいっさいは悪であり、天国に入るための修業道場であり、そこで神の教えを守り、苦痛に耐え、正しく生きたものだけが天国での永生を許される、というカソリックの首尾一貫した現実否定の教えに対する信者の側の一つの心理的補償作用といってもよい。これは、とくに中世において、人間の原罪を意識させ、罪の告白を強いる教会、そして自己否定を通じて神の教えを述べる威圧するようなイエス・キリストに対する信者の一つの心理的補償作用として、地上的女性であると同時に聖母であるマリア崇拝が、より民衆的な崇拝の対象になったことと共通性がある。当時の修道僧はマリアを理想の女性として仰ぎ、美しいマリア像を描いたし、民衆は「憐憫の母」として仰いだ⁽⁶⁾。

先ほど述べた自分と同じ弱い人間であって欲しいという信者の司祭に対する期待、つまり信者の心理的補償作用は、時として信者の心の中で告解をする者とそれを聴く者の立場を逆転させる、すなわち聖職交換の危険性をはらむことがある。霊の世界における子の父への一体化というものがジョイス文学に流れている主要テーマであるが、上にのべたような一体化の祈願こそ『姉妹』という作品の主要テーマであるといってもよい。ここに登場する少年には肉親がない。彼は伯父と伯母にひきとられている。そして中風にかかっている神父を父と仰ぎ、神父からカソリックの秘蹟や儀式などを教えられ、やがて彼も司祭になる準備を着々とすすめている。少年は毎晩のように、ある一軒の奥まった部屋の一室で死を待つ中風患者の神父のことを連想する。

「今度ばかりはあの人の生命は絶望であった (There was no hope...)。これで三度目の発作であった。毎晩のように (Night after night) 僕はその家を通して、灯がうつっているその四角い窓を注意して見た、そしていつの晩でも (night after night) そこのあかりは一定にか細く (faintly) ともっていた。もしあの人が死んだのなら、その暗くした (darkened) 日除け (blind) にろうそく (candles) の灯が写っている筈だと思った、というのは、遺体の枕許には必ずろうそくが2本たてられなければならないということを知っていたから。あの人はよく僕に『もうこの世におられるのも長

くはないよ。』と言ったが、私はあの人の言葉が当てにならないと思っていた(I thought his words idle)。でも今はその言葉が本当だったんだということが分った。毎晩のように(Every night)僕はその窓を見上げては、『中風』(paralysis)という言葉をとと(softly)つぶやいた。それはいつも僕の耳に妙な(strangely)響をあたえた、ちょうどそれはユークリッド幾可学の奇形『けいせつ形』(gnomon)とか公教要理の『聖職売買』(simony)という言葉の場合と同じであった。しかし今はその言葉は、僕に何か悪意のある罪深い(sinful)ものの名前のような響をつたえた。僕は恐しくてたまらなかつたが、それでもそれにもっと近づきその恐しい所業をこの目でじっくり見とどけたいと思った⁽⁷⁾。」

原文に使うある用語をこの中に挙げた理由は、『姉妹』ばかりでなく『ダブリン市民』という短篇集の冒頭部でもあるこのパラグラフに使うこれらの用語が、この作品また他の短篇ひいてはジョイス文学全体の音楽でいえばライトモチーフ的役割をしているからである。冒頭にある no hope という言葉はアイロニカルな響をもっている。神父の生命は no hope であるが、少年はこの死とそれから連想される罪というものに対して、後半に示してある様な恐れと同時に或る hope を抱いている。むしろ後者の方がより強く少年の心を動かしている。night after night が連続して二つの文の冒頭に使われ、また少し後に every night と形を変えて使われ、sinful なイメージと重りあっている。この night は、次の darkened blind と共に、この少年やまた彼の分身ともいえる『肖像』のステイヴン少年に君臨するアイルランドの父の世界、即ちステイヴンに「網」(nets)と叫ばしめた魂を虜にする世界をあらわしている。まさにこの死にかかっているフリン神父(The Rev. James Flynn)の世界は、少年の魂を捕える the captor の世界であると同時に、神父の paralysis という病気が象徴するように自ら肉体的にも精神的にも身動きできない半身不随の the captive の世界である。少年はこの後、神父の死を告示するカードを読むのであるが、彼の死によって自分が何かから解放された気分になっていることに気付いて当惑してしまう。その時の少年の心理はまさに作者ジョイ

スの心理であり、この神父に James という名を付したのは、研究者諸氏の指摘する通り、ジョイスが過去にあった、あるいはありえた自分を少年に託し、もしアイルランドにとどまっていたら将来なっていたかもしれない自分をプリン神父にみているといえよう。先程ちょっと触れた『肖像』第四章の場面は、神学校の校長である神の司祭がスティーヴンに司祭となつて一生神に仕えることをすすめているところであるが、その冒頭部に光を背にして日除けの紐を指で輪にしては笑いながら話しかける校長の姿が浮ぼりにされている。この the looped cord of the blind は、この対面の場で一つのライトモチーフとして暗示的に現われてくるが、もちろんそれは the captor および the captive の世界を示すものである。

「校長は光を背にして (his back to the light) 窓口のところに立ち、茶色の半日除け (the brown crossblind) に片肘をかけ、もう一つの日除けの紐をぶらぶら振ったり、輪にしたりして (looping the cord of the other blind), 微笑を浮かべて話していた。スティーヴンはその前に立って、屋根の上に薄れゆく長い夏の日の光や (the waning of the long summer daylight), ゆっくりと (slowly) 器用に動く司祭らしい指をちらりと眼で追っていた。相手の司祭の顔はまったく影の中にあつたが (in total shadow), うすれゆく日の光 (the waning daylight) が後ろからあたって、深い溝のあるこめかみや円い頭蓋の輪郭 (the curves of the skull) を浮き出していた⁽⁸⁾。」

ある解説によれば、この文章は神の司祭が、スティーヴンに対して代表している「自然の否定」、すなわち、「死」の心象を浮彫りにしており、「輪にされた紐」、「陰」、「円い頭蓋」、二度くりかえされる「薄れていく日の光」、「光を背にして」という言葉、これらは全て自然否定を強く暗示している、また「半日除け」も、「^{クロスブラインド}十字架の意味の分らない」または「^{クロス}十字架によって^{ブラインド}盲目にされた」という暗示を含み、「円い頭蓋」も死の心象導入に役立っている。しかし中心的な心象——二人の会見の^{エピソード}顕現は、司祭の指の動きにあり、「もう一つの日除けの紐をぶらぶらと振ったり輪にしたり」することは、首を^く括る紐を冷然とさし出すことを意味し、神の司祭が自然の否定、すなわち、死をもたらす役割を演じていることである、というこ

とである¹⁹⁾。

こうした恐しい父の世界がもつ *night, darkened, blind*, といった死のイメージは、次の *candles* や *softly* や *strangely* あるいは *sinful* といったイメージと共に、この少年やスティーヴンが父に求めて求められなかったより人間的な胸のつかえの解放を求め、かつその罪のゆるしを求めて行きつくやさしい聖母マリアのイメージを与えられた女性あるいは女体、あるいはそれをとおしての再生の心象として重ねられている。これらのイメージは、後述するように三番目の短篇である『アラビー』(Araby)の少年の思慕する女性や『肖像』のスティーヴン少年が求める数々の聖母マリア的女性像に投写されているが、とくに『肖像』第二章の終末部における、スティーヴンがまぎれこむ洞窟のような娼婦の世界において顕著である。黄色いガスがろうそくがわりに燃え、祭壇 (altar) が設けられ、『姉妹』における死の儀式は、ここではスティーヴンの女性をとおしての再生の儀式にかわっている。

「黄色いガス燈が (the yellow gas flames) 祭壇の前で燃えているように、(burning as if before an altar) 霞んだ空を背景に (against the vapoury sky), 彼の混乱した眼の前に浮びあがった。戸の前や澄火のついた玄関口に何か儀式でもやるような装いをした女たちが群がっていた。(was arrayed as for some rite.)……彼の唇はうつむいて接吻しようとはしなかった。彼は女の腕にしっかりと抱きしめられ、ゆっくりと心ゆくまで愛撫してもらいたかった。(wanted to be caressed slowly, slowly, slowly.) こうして女の腕の中にいると、自分が突如として力強く、大胆に、自信がついてきたような気がした。しかし彼の唇はうつむいて接吻しようとはしなかった。突然、女は彼の頭を引きよせると、その唇を彼の唇に重ねた。彼は女のあけすけな上眼づかひの瞳のうちに女の素振りの意味を読みとった。もう我慢ができなかった。彼は眼を閉じて、心も体も、すべてを女にまかせ *surrendering himself to her, body and mind*, 女の柔かく動く唇の暗い圧迫 (the dark pressure of her softly parting lips) のほかには何も意識しなくなった。その唇は、何かおぼろげな言葉を伝えるかのように、彼の唇だけではなく、彼の頭脳をもしめつけた。こうして唇を合わせていると、消えいらんばかり

の罪よりも暗く (*darker than the swoon of sin*), 物の音や匂いよりも柔らかい (*softer than ~*), 微かな未知の圧迫 (*an unknown and timid pressure*) を感じた⁽¹⁰⁾。」 (*swoon, timid* は『姉妹』にあった *faint* と重なりあい, *unknown* は同様に *strange* に重なる。) 檻 (*prison*) または網 (*net*) のイメージをもつ父の世界に求めた少年の一体化 (*communion*) の祈願とその挫折感, 『肖像』のステイヴンによってこのように洞窟 (やはり一種の *prison*) の世界に住む女性と同じ罪を犯すというちがった意味での一体化 (*communion*) によって解放されようとしている。神学校の校長が指でつくっていた日除けの輪は, ここではステイヴンの体にまきつけられた女性の丸い腕 (*her round arms*) に転移している。そして, この娼婦の腕は, 『姉妹』におけるフリン神父のかぎ煙草をつかむことさえできない中風にかかった手, またその遺体が力なく (*loosely*) こわれた聖杯をかかえていた時のあの腕と対照されている。

さて, 先程の『姉妹』の冒頭の場面にもどってみよう (前掲引用⁽⁷⁾)。少年は, フリン神父が口ぐせのように言っていた「もうこの世におられるのも長くはないよ。」という言葉が当てにならないと思っていた (*I thought his words idle*)。この *idle* (当てにならない) という語は, 後にフリン神父の遺体が力なくかかえていた *idle chalice* (中身の無い, 空な聖盃) と重なりあって, 少年 (子) と神父 (父) の, また神父をとおしてのより大いなる神 (全能の父) との一体化 (*Communion*) がまさに *idle* であったことを象徴し, 後で判るように生前のフリン神父の少年に対する秘蹟その他に関する教えが少年の心に何もこしていない, まさに *His words were idle*. ということを示している。また, この世に対するあの世 (天国) という観念が少年に信じられないという暗示もある。

少年は, その神秘的な秘蹟によって地上における最も罪なき者として選ばれた人間としての神父の権能に惹かれると共に, 彼の体内に疼いてきた男性本能と自我意識, その罪深い思考と行動をやがて成るかもしれない未来の「我」たるフリン神父に求めようとしている。それはカソリック体系の上 (神) から降りてくる *Communion* ではなく, あくまでも下 (人間)

から求めてゆくナルシズム的な Communion である。

少年は家に帰り、そこに居る伯父とコッター爺さん (Old Cotter) から神父の死をしらされる。2人の大人は日頃、神父が非健康的な教育によって子供を好ましくない状態にしぱりつけていると思っているので、神父の死に対してこの子がどのように悲嘆の反応を示すか期待をもって見るのだが、少年は自分は成熟したんだという自覚からさも無関心な態度を執り、また子供扱いにされたことに激しい怒りを感じる。

少年はその晩奇妙な夢をみる。

「僕の部屋の暗黒の中で、またしてもあの中風患者の生氣のない灰色の顔が見えてきた。僕は毛布をすっぽり頭からかぶりクリスマスのことを考えようとした。しかし灰色の顔はそれでもなお僕を追っかけてきた。それは何かをつぶやいていた、僕にはそれが何かを告白したがっているんだということがわかった。僕は自分の魂がどこかしらないが快樂と悪の住む世界に引きずりこまれてゆくような気がした、そして、そこでもあの顔が僕を待ちうけていた。それはささやくような声で僕に告白しはじめた、そして僕は、どうしてその顔が絶えず笑い、唇が唾液でぬれているんだろうとおもった。しかしその時僕はそれが中風で死んだんだということを思いだした、そして聖職売買者の罪を許してやるかのように僕もいつのまにか笑っていた⁽¹¹⁾。」

川口喬一氏が指摘しておられる通り、少年と神父の間で聖職交換が行われ、ここで、ふたりは完全な共犯者となる、つまり少年の一体化の祈願は夢想の中でできとどけられる⁽¹²⁾。

少年は亡霊の恐怖から逃れるためにまだ七月だというのにクリスマスのことを考えるが、すでに罪のもつ恐怖と同時に快樂の味を知っているかのような少年の心には、自分と灰色の顔がゆきつく快樂と悪の場所で、奇妙な妥協と共感がふたりの間で起る。川口氏はさらにこの少年の夢想の場面と『肖像』第一章のステューヴン少年が寄宿舎のベッドの中で夢想する場面を比較し、両者の成熟度のちがいを指摘しておられるが、確に前者が短篇というテーマの圧縮された枠組にはめこめられているため、後者の魂の

発展小説という枠組の場合と比べて、罪や悪に快樂の味があることをすでに知っている成熟した段階にあるわけである。私は、この『姉妹』における少年の成熟度は、『肖像』第四章の校長と対面するスティーヴンの状態に匹敵すると思う。『姉妹』と『肖像』のこの場面には数々の共通面がある。『姉妹』の少年は、あの奇妙な夢を見た日の翌朝、神父の家の前にはられていた死を報ずるカードを見てその死が決定的であることを知る。そして、生前の神父と自分の関係は何だったのか、と考える。神父は自分を聖職に就かせるための教育を施した人であった。そういう意味での父と子の魂の一体化 (Communion) は果されたのか、と考える。聖職者の神秘性、ミサの応答等について神父は質問をし、自分が答えられないと彼はうなづきながら、かぎ煙草を鼻にもっていつては大きく口をあけ、舌の先を下唇につけたまま微笑しているだけであった。神父の大きな口、大きな生気のない歯ならび (his big discoloured teeth) は『肖像』第四章において司祭がつくる「紐の輪」 (the looped cord of the blind) とともに子を吸収する父 (the absorbing father) あるいは (the captor) としての父のイメージである。『姉妹』の少年は、神父の死を知った後、昼間陽のあたる通りを歩きながら、自分が神父の死に対して次のような気分になっているのにおどろく。

「僕は、僕もその日の天気もその死を悔む気分になっていないのが不思議だった、そして、あの人の死によって何ものかから解放された気分になっている自分を発見して当惑した⁽¹³⁾。」

これは、『肖像』第四章において司祭と別れたスティーヴンが感ずる自己発見と共通している。司祭の言った誇り高き司祭職の権能への憧れと尊敬の気持は、いつの間にか外界の隠やかな夕べの空気の中にかき消され、憧れと尊敬は不安と不快の気持に変わり、その変容ぶりに彼自身おどろいているのである。『姉妹』の少年が、神父の死を報ずるカードに書かれていた The Rev. James Flynn という名前を見てやがてなるかもしれない自己の司祭としての運命を考え、自己にうえつけられたはずの神父の魂が自分に何の意味ものこしていないのに驚くと同様に、スティーヴンは「イエズス

会士スティーヴン・ディーダラス師」(The Rev. Stephen Dedalus, S.J.)

という自分が司祭になった時につけられる新しい名前を想像し、そして自分の魂がそれが持つ権能から遠く離れていることに驚くのである。

「こういう思い出(かつてのクロンゴウズ校での宗教々育)に耽っていると教育よりも信仰よりも強いある本能、微妙な敵意に満ちた本能が彼のうちに覚めて、そういう信仰生活に一步近づこうとする毎に勢いを増し、そのような生活に黙従させまいと彼を武装させた。そのような信仰生活の冷たさと秩序とに彼は反撥した。……これまで魂の至聖所と考えていたところから自分の魂が遠く離れているのに彼は驚いた。一度、はっきりとして取りかえしのつかない行為によって現在でも来世でも永久に自分の自由が消滅しそうになる時自分を支配していた長年の秩序と服従の力も頼りとならないことに彼は驚いた⁽¹⁴⁾。」

こうした自己発見が宗教から離れさせる原因になるということは、ジョイスの主人公達の著しい特徴である。そこには激しい自我の追求がみられる。スティーヴンが、娼婦と大罪を犯し、死と審判の説教と告解を経て徹底した自己欲制の精進をずる時に経験する自己発見もこれと同質のものである。

「大罪を犯す誘惑は少しも感じなかった。しかし、こんな手のこんだ精進や自己抑制をやった後で、子供らしい詰らない欠点にやすやすと自分が乗ぜられるのに気がついて驚いた。母がくしゃみをするのを聞いたり、自分の精進の邪魔をされたりすると感じる怒りを抑えるのに、祈りも断食もまるで役に立たなかった⁽¹⁵⁾。」

さて、『姉妹』における少年のあの夢想、即ち罪ある道への誘惑とそれを神父に求める一体化の祈願は現実においてかなえられたか？ 少年は神父が死んだ日の夕方伯母と共に神父の家を訪れる。少年は夢で描いていた様に神父が笑っているだろうと期待するが、その祈願は完全に裏切られる。

「僕達が立ちあがってその枕許に行ってみたところ、あの人は笑ってはいなかった(not smiling)。礼拝式用の服を着こんで、厳としてまた豊かに横たわっていた。その大きな手は力なく(loosely)聖杯(a chalice)を抱え

ていた。その顔は何かに闘いを挑むかのようで、灰色で、がっかりとして、鼻穴は真黒な洞窟のようで (black cavernous), まわりには疎らな白い和毛にこげが生えていた⁽¹⁶⁾。」

さらにその挫折感は、老女イライザ (Eliza) の語る話によって決定的となる。

『あれは (フリン神父) 平生から几張面過ぎる方でした、司祭としての勤めが重すぎたんですね。あれの一生は、いってみれば、思うようにいかなかったということですね。……聖杯 (a chalice) をこわしたということがそもそも始まりだったんですよ。もちろん何でもなかったんですよ、というのは聖杯には何もは言ってなかったんですから (it contained nothing)。……あれからというものは、ふぬけになったみたいで、誰にも口を利かず、ひとりて夢遊病者みたいに歩きまわったりするようになったんですよ。……ある晩なんか人を訪ねる用があるのに、どこを探してもいないんだそうですよ。……するとまあ、どうでしょう、懺悔室の暗い所に、あの人がひとり坐って、目を大きく見開いてひとり低いか細い声で (softly) 笑っていた (loughing-like) というじゃありませんか?』

彼女は突然、耳を澄まして何かを聞きとろうとするかのように黙った。私もまた耳を澄ました。しかし家の内には何の物音もしなかった。それで私は、さっき見たと同じように、お坊さんは、胸の上に空っぽの聖杯 (an idle chalice) を載せたまま、死んでも厳として、何かに挑戦するかのような顔つきで、棺の中にじっと横たわっているのだ、ということに気づくのであった⁽¹⁷⁾。」

ここには引用⁽⁷⁾ および⁽¹¹⁾における少年の夢想の中にあらわれた心象の変化がみられる。同じ語であっても、少年の心象においては全く逆の意味にとらえられている。夢想の告白におけるあの共に暗い罪の快樂の味を分かちあわんとするひそやかな (soft) 笑い (smiling) は、現実では自嘲的なか細い (soft) 笑い (loughing) に変っている。少年の祈願は裏切られ、そこには最後まで罪なき生活を送ろうとして秩序と義務に縛られた父の姿があった。老婦人にとっては「何もはっていない」ひいては少年にとっては「空な、うつろ

当てにならない」(idle) 聖杯、しかもそれを力なく (loosely) 抱えている神父、これは、全能の父と会衆 (イライザとナニーという老姉妹、少年が代表する) の一体化 (Communion) の挫折であり、神父と会衆の一体化 (communion) の挫折でもある。少年にとっては二重の意味での挫折であった。イライザに誘発されるように、少年は神父の死体から何かを聴きたいという期待をもつ。それは、カソリック信仰に生涯を貫いた一神父の死体をとおして何か生きた信仰の証、天国からの声を聴かんとする絶望的な期待ではなかるうか。それとも少年の心にはあの夢想の余韻が残っており、イライザとは違った意味をもつ天の声を期待しているのだろうか。いずれにしても死と再生の儀式は Communion の挫折とともに不首尾に終るわけである。

ここに登場している四人の人物、即ちイライザとナニー、少年とその伯母はそれぞれ狭い意味ではアイルランドの、広い意味では世界のカソリック会衆をあらわし、もっと広い意味では宗教が象徴する真理なるものに立ち向う人間の四つの型をあらわしているようである。イライザは多弁であり、神父に対する信頼や愛情を吐露しているうちに、その言葉の意味も悟らぬまま無意識の領域では、神父の無能、自分の信仰の空虚を暴露している。彼女の聖杯についての *it contained nothing* という言葉は、自らの信仰の空さを無自覚のままにさらけ出しているともいえるし、次にでてくる少年の *an idle chalice* という言葉は、彼が神父の死に際し味った自己発見の驚きと同じように、大人の信者の中に自分と同じ信仰の空しさを発見した驚きやそれに対するアイロニーまたは抗議が含まれていると思う。イライザが、一見神父に対して信頼と愛着を持っていたことを示す話を語るころから無自覚のうちに彼女の不信仰を暴露する場面に変るその中間点で、ちょっとした中断があり、その短いセンテンスにもりこまれている語句にはきわめて暗示的な心象が顕現される。

「彼女は、過去と親しく交わる (*she was communing with the past*) かのうように想出にふけりおし黙ってしまった、それからじっくり考慮するかのうように (*shrewdly*) 言うのであった⁽¹⁸⁾——」

過去と commune するということは、生前の神父との霊の一体化であり、これは天国からの声が聞けなかった（前掲引用⁽¹⁷⁾）、つまり死後のそれと同様、空^{うつろ}なものであった。そしてそれは、これから無自覚的に自己の不信仰ぶりを語ろうとしている彼女にかぶせられた shrewd というきわめて意識的で邪悪な意味あいをもった言葉と共に、暗示的でアイロニカルなひびきをかもし出している。

イライザの妹ナニーは、姉と対照的に聾に近いくらい耳が遠い。姉が多弁の無知であるならば彼女は沈黙の無知を代表して真実の意味が全然分らない人間を代表している、という解釈が多いようであるが、そういう風に割りきった表現が使えるであろうか。曲げた頭が殆んど手摺の高さから出ないような恰好でコソコソと階段を昇って遺体のところまで伯母と少年を先導し、常に姉の陰にかくれているナニーは、姉が語る神父の話の合間でもソファでねむってしまうように、人間の対話からはずされた無知で無能者のような印象を与えるが、必ずしもそうではない。彼女は姉の言いつけも理解できるし、弔問客への思いやりもあるし、少年がシェリー酒とクラッカーを食べなかった時に失望した様子を見せる程喜怒哀楽の情も持ちあわせている。むしろ、神父について語る場合のように、イライザの意識的心性の方が無知でまちがいが多いのではないか。イライザが語る時のナニーの居眠はユーモラスな対照であると同時にイライザに対するアイロニカルな効果をおよぼしているとおもえる。ナニーの沈黙は知られざることは知らずという、行きつくところのない、宿命的な人間の哀れさをその声にならない心の叫びでもって無意識のうちに表現しているのではないか。物語の最後に流れる聞こえるべくして聞こえない不気味な沈黙は、ナニーの沈黙と同じ意味と効果をもたらしていると考えられる。しかしその沈黙もイライザの多弁同様不毛な Communion の象徴ではある。

少年の伯母は、カソリックの世界における平均的な信者であり、それは伯父やコッター爺さんの神父批判に対して執る態度によって明らかである。

少年自身は、自分と同じ心象を大人に求めてゆくか、あるいは大人の心象をとおして自分の心象が明らかになり、また影響されてゆくといった、

心の揺れの激しい子供の世界を体現している。したがって少年はあくまでも initiate される受身的存在であり、少年の挫折感¹⁹は神父自身によるばかりでなく、むしろ姉妹、とくにイライザの Communion の空しさから自己にはねかえってくる挫折感である。したがって、この物語のタイトルが神父でもなく少年でもなく姉妹 (The Sisters) となっている説明もつくだはなかろうか。sister の意味は、ここでは三つ考えられる。(1)血縁関係における姉妹、(2)世話女、看護する女、(3)ある宗派の女性の信徒同志。二人は世俗の世界ではフリン神父と姉妹関係にあり、あらゆる世話、看護もしている。また教会という聖なる世界においては、司祭と信徒の関係でもある。しかし聖と俗の両世界において彼らと神父の間の Communion は不毛である。イライザが「あれ(フリン神父)はあたしたちには大した面倒もかけなかったんです。死んだいまだってそうですが、家にもひっそりしたもんでしたからねえ⁽¹⁹⁾。……」という時、世俗の世界における彼らの Communion の不毛性が明らかとなりアイロニカルな意味が暗示されている。

少年の挫折感、それは、罪なき聖なる父の領域に子としての人間の本能の疼から生れる罪深い要素が混然一体となった、ペルシャをしのばせる東洋の神秘とロマンスと罪の快楽を味わせてくる世界で、父とともにその罪の快楽の実を食べたいという一体化の祈願の不首尾であった。しかも空^{うつろ}な聖杯が象徴するように、老姉妹によって代表される大人達の信仰の空しさは、少年の人生における魂の抛りどころを失わせ、不安感をつのらせ、自己の幼稚さに対するにがい認識を促す結果となった。この挫折感の心理的補償作用としてカソリックの世界に育った少年が求めてゆく唯一の道は、聖母マリアへの一体化の祈願である。少年は、フリン神父のあの灰色でまっ黒い洞窟のような鼻孔をもった挑戦するような顔から完全に自由になったわけではない。その捕えられた状態のまま、その罪深い本能を許容してくれる憐憫の母としての聖母マリアへの祈願、あるいは彼女のイメージを備えた女性たちに自己の心性との一致を求めての遍歴を重ねることによって、自分の魂の不安定さ、幼稚さから解放され、再生を願っているわけ

である。少年ヤスティーヴン少年が求めてゆく女性がひとりひとりの区別をもたず、少年自身が抱く同じ心象によってぬりつぶされているのはそのためであろう。

『ダブリン市民』中三番目の短篇『アラビー』(Araby)は『姉妹』の少年が夢想するペルシャ同様、東洋の神秘の世界、ロマンスと罪の快楽を備えた世界を象徴する。ここに登場する少年は、『姉妹』に登場する少年と同一人物ではないかもしれない。しかしその置かれている生活環境は象徴的には共通した意味をもっており、少年のアラビーというバザーへの遍歴も、『姉妹』の少年が求めるのと共通したある一体化の祈願とその挫折をあらわしている。この少年も伯父の家にひきとられている両親のいない子供である。彼の住む家はリッチモンド街の行きどまり (blind) にあり、その家は以前ある牧師の所有していたもので、牧師は奥の客間で亡くなったということである。その牧師に妹がいたこと等、『姉妹』におけるフリン神父とシチュエーションが相似している。閉じこめられた空気のかびくささ、聖職者の生活を描いた Walter Scott の『僧院長』や『敬虔なる聖餐拝受者』が紙反古となって黄色に変色して散らばっているその部屋から少年はある一人の年上の女性を思慕する。これは『姉妹』における神父の死後の少年の絶望と捕えられた状態を象徴している。Mangan's sister と呼ばれるこの女性の全体像は、少年のナルシズムによる一体化の願望によってあいまいにされている。

「私の家の戸口の真向いにある街燈からの光が、彼女の真白い頸の線 (the white curve of her neck) を浮き出させ、その髪を輝かし (lit up her hair)、そして下って、鉄柵の上の手を照らした (lit up the hand upon the railing)。それは彼女の服の片面にも落ちて、姿勢を崩して立っている時にほのみえる、ペティコートの白い縁 (the white border of a petticoat) に射した。……「アラビー」という単語の綴り音は、私の魂が耽り楽しむ沈黙の中から呼ばれ、私に東洋的な魔法をかけるのであった。……表に面した窓から、私の仲間が下の通りで遊んでいるのが見えた。彼等の叫び声は、弱く不明瞭だが、上まで聞えてきた。私はひんやりとした硝子に額を押し

つけて、彼女が住む暗い家 (the dark house) を見やった。私はただ想像による彼女の茶色の洋服を着た姿——頸の線と鉄柵の上の手と洋服の下の縁に (at the curved neck, at the hand upon the railings and at the border below the dress), ひそやかに街燈の光が射している——を目に描いて、一時間もそこに佇んでいた⁽²⁰⁾。」

上の引用中に二度くり返されるか、強調されている、女性の白い頸の線、輝く髪、鉄柵におかれた白い手は、『ダブリン市民』中の短篇や『肖像』に登場する女性に一樣に与えられているイメージである。「鉄柵に置かれた手」は、『イーヴリン』という短篇の女性主人公を想起させる。この短篇では、イーヴリンという若い女性が、ダブリン市の片隅にある埃 (dust=死のイメージ) の多い家で、狂って死んだ母親の身代りとなって身を犠牲にして働くわけだが、恋人のフランクがブエノス・アイレスに行って結婚しようとした時に、狂い死にした母親の一生を回想して、このまま母と同じ道を進む自分を想像し、フランクとの脱出によって自分を生きかえらせようと決心する。しかし、出航を告げるドラが鳴ってよいよ船が出る時になって、彼女は不安から嘔吐感に襲われ、フランクが叫び声をあげて彼女の手をとろうとするが、その手は凍結したように鉄柵にしがみついて離れない。この鉄柵は何かの脱出を阻止するもの、あの神父の暗い部屋や告解室や輪にされた紐が象徴するものと同じイメージである。『アラービー』の少年が Mangan's sister の手に添えている鉄柵のイメージは、彼の心にある捕われの身であるという意識の同一性を女性に求めてゆく一体化への祈願のあらわれであり、女性のフィジカルな面をとおして自己のスピリチュアルな面を明らかにしてゆくという特異性を示すものである。引用⁽²⁰⁾にあった女性に関する他の肉体的特質について『肖像』におけるステイーヴンの場合と比較してみるとそこに一致した特質がみられる。たとえば、ステイーヴンの幼年時代の恋人といってもいいアイリーン (Eileen) に対して抱くイメージを挙げてみよう。

「ダンテは僕がアイリーンと遊ぶのを嫌がった。アイリーンが新教徒だからというのだ。ダンテが幼い頃、新教徒と遊ぶ子供を知っていたが、新

教徒はいつも聖マリアの連袴をからかっていたというのだ。「象げの塔」(Tower of Ivory)「黄金の堂」(House of Gold)などと皆いつていた。どうして女が象牙の塔や黄金の堂なのだろう。(How could a woman be a tower of ivory or a house of gold?)……アイリーンは長くて白い手 (long white hands) をしていた。ある夕方、鬼ごっこをしていた時、アイリーンはこの手で僕の眼をおおった。長くて、白く、ほっそりして、冷たく、やわらかい (long and white and thin and cold and soft)。あれが象牙 (ivory) なのだ、冷たく白いもの (a cold white thing) あれが象牙の塔の意味なのだ⁽²¹⁾。」

「アイリーンも長く細い冷たい白い手 (long thin cool white hands) をしていた。女の子だからだ。それは象牙 (ivory) のようだった。だけど柔らかい (only soft)。それが「象牙の塔」の意味なのだ。しかし新教徒はそれが判らないのでからかったりしたのだ。いつだか、ぼくはアイリーンと並んでホテルの庭を見ていた。給仕が旗竿に旗をするすると掲げていた。陽のあたった芝生をフォクス・テリアがあちこち走りまわっていた。僕がポケットに手を入れると彼女もそこに手を入れた。僕は彼女の手がとても冷たく、細っそりとして、柔らかい (cool and thin and soft) のに気がついた。ポケットって奇妙なものね、と彼女はいった。それから急にぱっと飛びのいて、曲った坂道を笑いながら駆け下りていった。その金髪 (Her fair hair) が陽に輝く黄金 (like gold) のように後ろになびいていた。「象牙の塔」「黄金の堂」もの事はよく考えてみれば判るものだ⁽²²⁾。」

斯くして聖母マリアのイメージは全ての女性なるものにかぶせられる。『アラビー』の少年の求める女性像も同じである。

「彼女の幻影は、ロマンスにとって最も忌むべき場所ですら僕の心から離れなかった。……僕は想像の中で、自分の聖杯 (my chalice) を敵のむらがりから安全に運び出すように思ったのだ。彼女の名前は、時々僕自身も解せない奇妙な祈祷や神の讚美となって、口に出て来た。僕の眼はたびたび涙でいっぱいになった (それが何故だか僕にも分らなかったが)、そして、時々僕の心臓からあふれ出るものがどっと胸に流れこんでくるようにおも

われた。……僕の肉体は豎琴の^{ハーブ}ようなもので、彼女の言葉と身振りは^{いと}絃に触れる指先であった。

或る晩、僕は牧師さんがそこで死んだという、奥の客間に入っていった。暗い雨の降る晩で、家内に物音一つしなかった。こわれた窓硝子の一つをとおして、雨が大地を打つ音、いと細い水の針がひっきりなしにびしょ濡れのベッドにあたっているのを、僕は聞いた。どこか遠いところの燈火か、あかりのついた窓かが、下の方に光っていた。僕は、眼に見えるものがあまりないことをうれしく思った。あらゆる感覚がそれ自身をおおい隠そうと欲しているようで、僕は自分が感覚から離れかかっているのを感じて、両方の掌を強くふるえるまでに押し合わせ、何遍となく『おお愛よ！おお愛よ！』と呟やくのであった⁽²³⁾。」

ここで出てくる「僕の聖杯」は、『姉妹』においてフリン神父が力なく抱いていた「^{うつろ}空な聖杯」と対比されるものであり、司祭をとおして神への Communion は、ここでは聖女と地上的女性のイメージを兼ね備え、聖母マリアを彷彿させる（あるいは聖母マリア自身）女性との Communion をとおして芸術の神との一体化の祈願へと変容している。また、父（フリン神父が象徴している）を失いはじめて独立した少年が、父の座を奪わんとする高漫な自我確立の宣言がすでにめばえており、少年からみれば、フリン神父の聖杯が空虚で麻痺状態の言葉を産み出すものであったのに対し、少年の聖杯は、カソリシズムの世界からみれば、神の恩寵から墮ちることを意味する世間の汚濁、肉の道に入って、そこから学びとると同時に、それにおぼれることなく自らの中から生れ出る真に創造的な言葉を産み出す聖杯を意味しているといえよう。「群がる敵」は、古い、伝統的な、意味のない陳腐な言葉を投げつける群集、つまり芸術上の敵を暗示しており、『肖像』でスティーヴンが逃れんとする nets の一つである。

少女の名前は少年によって聖母マリアを讃える祈りとなる。「アラビー」が含む豊饒的、性的イメージと少年の恋する少女に対する聖なる祈りの重複は、霊の道に入門しながらも the son artist として肉なる者の道への誘惑を断ちきれない少年の心の葛藤をあらわしているともいえる。それは、

引用⁽²³⁾の後半に示されている如く、五感という肉体の導火線を押し殺そうとするが、それから魂がすりぬけるのを恐れて、冷たい窓に手の平を押しつけて「おお愛よ！ おお愛よ！」と叫ぶような特種な愛の様相にもあらわれている。しかもこれが死んだ牧師の部屋で行われるということは甚だ暗示的である。少年のもう一つの特徴（『肖像』のステイーヴンにもあてはまる）は、「僕の肉体は豎琴^{ハープ}のようなもので彼女の言葉と身ぶりは絨^{いと}に触れる指先であった。」とある様に、彼の愛は全く受身的な愛で、これは男性から女性に積極的に働きかける愛ではなく女性の腕の中で再生を遂げる母性的愛によって成立するものである。この少年ばかりでなく、ステイーヴンが、世間の喧争が潮騒の如く引いた暗黒の環境 (darkness) の中で、彼の求める女性と二人っきりで (alone という言葉が頻繁に出てくる) 会うことによって再生することを祈願するのは、この母性愛(聖母マリアの愛)への憧れを証明するものである。

少年は Mangan's sister に捧げる贈物を買うために「アラビー」というバザー会場に出かける。彼があらゆる障害を乗り越えてもそこに出かけようとするその気力は、一種の宗教的熱意であり、その豊饒と性的イメージをもったバザー会場は、少年にとってある種の Communion を受ける一つの教会である。少年はアラビーの会場の灯火の消えた静けさを教会の礼拝後の暗黒と静寂にたとえている。少年の順礼 (Pilgrim) の旅は、伯父の無理解で遅く来すぎたためと、会場の店員である男女の卑俗な会話と一女店員の熱意のない応待ぶりによって挫折してしまう。

「暗黒をじっと仰ぎながら、僕は、自分が虚栄に眩み、それに弄ばれた情けない人間であることを知った、そして僕の眼は、苦悩と怒に燃えるのであった⁽²⁴⁾。」

『アラビー』の少年の挫折は、彼が再びあの『姉妹』の最後にあった暗黒と静けさに帰る運命にあることを暗示している。

ステイーヴンが求めてゆく女性群は、順を追って挙げれば、(1)アイリーン、(2)メルセデス (『モンテ・クリスト伯』の女主人公 Mercedes)、(3)エマ (E-C, Emma Clery)、(4)娼婦、(5)流れに立つ少女となる。これらの女

性は、すでに述べたごとく、ひとりひとりの区別はなく、すべてスティーヴンの内部に存在するただ一人の女性（聖母マリア的女性）の分化したものである。

「彼はまたメルセデスを思い出した。その姿を心に浮べていると、不思議な不安が彼の血の中に忍びよるのであった。時には身内が熱くなって、彼はただ独り夕方の静かな街をさまよった。庭の静けさ、暖かそうな窓の光は彼の不安な心にも優しい力を注ぎかけた。遊んでいる子供たちの騒ぎは彼を苛立たせ、その愚かしい声を聞いていると、クロンゴウズの時よりもっとはっきりと、自分は他の連中とは違うのだという気持ちがあった。彼は遊ぶ気にはなれなかった。彼の魂がいつも見つめている幻の姿にこの現実の世で会いたかった。それを何処に求め、如何にして求めたらよいのか彼には判らなかつた。しかし彼の方でわざわざ求めなくとも、その幻にはいつかは出会うだろうと、いつもの予感で判るような気がした。二人は前からの知りあいで、逢い引きの約束をしてあるかのように、何処かの門口か、人目につかない場所で、静かに会うことになる。二人だけで (alone) 闇と静寂 (darkness and silence) とにつつまれ、そのこの上なく優しい愛 (tenderness) の瞬間に、自分の本質は変わるだろう。彼女の眼の前で彼の姿は消えて、目には見えない何ものかになり、一瞬のうちに彼は変ってしまう。その不可思議な一瞬間に、弱気と憶病と稚気とは彼からなくなってしまふだろう⁽²⁵⁾。」

すでにここには、聖母マリア的、地母神的な女性、即ち『肖像』第四章における「流れに立つ少女」との出会いとそれによる再生の予言がなされている。

「翌日彼は二階のがらんとした部屋で幾時間もテーブルに向っていた。彼の前には新しいペン、新しいインク壺、新しいエメラルド色のノートブックがあった。つい癖で彼は最初の頁の一番上にイエズス会の標語の頭文字 A・M・D・G（より大いなる神の栄光のために）を書いてしまった。その頁の第一行目には彼が書こうとしている詩の題『E・Cによす』というのが見える。こんな風には書きはじめていいのだと彼は思っていた。……

こうしていると、平凡で無意味におもえるすべてがその場の光景から消えさっていた。鉄道馬車も馭者も馬も跡かたもなくなって、彼も彼女さえもはっきりとは見えなくなった。詩はただあの夜と香ぐわしい微風と乙女のような月の光の輝きだけを語った。葉の落ちた木の下に静かに立っている時の主人公の心には何か名状しがたい悲しみがひそんでいた。別れる時が来た瞬間に、一方がこれまで抑えに抑えていた接吻がともに交わされた。詩を書き終えた後で、頁の下に L・D・S (永遠に神をほめたたえん) と書きそえた。ノートを隠すと、彼は母の寝室に行き、化粧台の鏡にうつる自分の顔を長い間じっと眺めた⁽²⁶⁾。」

ここにも静かな環境の中の二人っきりの出会い、自己の同一性を他者(女性)に求める特異な愛、ナルシズム的愛といった要素があらわれている。

その後、スティーヴンは娼婦と大罪を犯し、肉欲の罪はあらゆる罪を生むという恐い地獄の説教を聞いた後彼は一時的に罪を悔い、五感を抑制してまで勤行にはいり、告解もする。しかし説教後の彼が行う改心の務めは、確固としたものではなく、彼は自分を恐怖におとし入れた父(神)に対する愛を感じていない。彼が心から愛するのは聖母マリアである、そして彼女の騎士になりたいと念ずる(彼は聖母マリア信心会の組長である)。彼の心で娼婦訪問とマリア信仰の間に少しも葛藤が起らないことを自分自身不思議に思う。

「神の姿を彼から被い隠していた彼の罪は彼を一段と罪人の避所(マリア)へと接近させた。彼女の瞳は優しい憐みをもって彼を見ているようにおもえた。彼女の神聖さ(holiness)、そのかそけき体(frail flesh)からかすかに(faintly)輝く不思議な光は、彼女に近づく罪人を恥かしめることはなかった。もし彼が自分の身から罪をかなぐり捨てて悔い改めたいという気になったとすれば、そういう気持にさせた衝動は、彼女の騎士になりたいという願いであった。狂おしい肉欲がおさまった後に、彼の魂が恥じらいながら彼女(即ち明るく調和し、天を語り、平和を注ぐ暁の星をその象徴とする)に向うとするならば、それは汚らしい恥ずべき言葉と、淫らな接吻の味い

のまだ残っている唇でひそやかに (softly) マリアの名をつぶやく時であった。これは実に不思議なことであった⁽²⁷⁾。」

地上的女性と聖女のイメージを兼備したマリアと肉欲との結びつきは、凍らせるような父の接近を避けるために彼が無意識に考え出した避難口である。

スティーヴンは静修の一日目で彼の肉欲の罪を悔いているようにみえる。彼の娼婦への想いは死と審判の説教の前に吹き飛んでしまったかのようなのである。しかし彼の悔い改めはどのような形をとったかという点、彼は聖母マリアに自分と E・C (即ち Emma Clery) との恋を認め実現に導いてくれるように乞うているのである。これは非常に皮肉的である。父 (神) は息子の肉欲への冒険によって傷ついている、息子はその冒険を深く恥じているようであるが、その肉欲の冒険の実現をマリアを通して天に乞うているのである。

「慚愧の苦悩が消えさっていくと、彼は自分の魂をその卑屈な無気力状態から救いあげようとした。神も聖母マリアも彼からあまりに遠いところにいた。神はあまりにも偉大で厳しかった。聖母マリアはあまりにも純潔で清らかであった。しかし彼は、広野でエマの傍に立ち、身を低くして、涙を浮かべながら、俯向くと彼女の袖に接吻するさまを空想した。

天の蒼白い海に西の方へと雲が流れている、その優しい澄んだ夕空の下の広々とした原に二人は並んで立っていた。あやまちを犯した二人の子供であった。彼らのあやまちは、ただ子供のあやまちにすぎないのだが、深く神の尊厳を傷つけた。しかしそれは、『見て危き地上の美ではなく、その象徴である暁の星のごとく、明るく調和する』マリアを傷つけることはなかった。彼の方に向けられたマリアの瞳は怒ってもいなかったし、非難の色もなかった。マリアは二人の手を取らせて、二人の心に向かって言った。——手をお取り、スティーヴンとエマ。いま天は美しい夕べです。お前たちはあやまちを犯したけれど、いつも私の子供です。お互いの心が愛しあっているのです。さあ、手をお取り、私の可愛い子供たち。そうすれば、お前たちはともに幸せになり、お前たちの心は互いに愛しあうように

なるでしょう⁽²⁸⁾。」

スティーヴンは、父が彼を愛しうることを信じきれない。

「御父は永遠より鏡に写すごとくその至聖の完璧 (His Divine Perfections) を凝視して、かくて永遠の御子を永遠に生みたま^{とこしよ}い、聖霊は永遠より御父と御子から出でたもう——こういう比喩的説明の方が、そのいかにも神々しい不可測性のゆえに、神は彼がこの世に生れる以前の長い年月、彼が存在する以前の長い年月、永遠から彼の魂を愛されていたのだ、という単純な事実よりも容易に受け入れることができた⁽²⁹⁾。」

「御父は永遠より鏡にうつす如く…」という箇所において明らかなごとくスティーヴンは自分と同様に神のナルシズムを信じようとしている。子 (スティーヴン) を手中に収めて永遠に子供として扱おうとするために圧倒的な力を行使する父 (神) は、彼にとって子を愛する父として受けとめられない。しかしながら、愛はスティーヴンの世界に存在する。神の花嫁たるマリア、創造された世界とその象徴である女性への愛である。第三章でスティーヴンは父 (神) の攻撃を払いのけるために無意識のうちに聖母マリアへの祈りを捧げた。父の世界の冷たい灰色の支配下にありながら彼を暖めるのは、母なる女性への思慕である。

スティーヴンが最後に出会い、彼の静的芸術創造の衝動をかりたてる「流れに立つ少女」は、これまでの女性にあたえられてきたすべてのイメージを総合している。

「彼は独り (alone) だった。人には注意されず、生命の奔放な中心に近くいて楽しかった。独り (alone) で、若く、気ままで、情熱のおもむくままだ。荒々しい大気と塩っぱい流、貝殻や海草の海の幸、薄雲のかかった灰色の陽、派手な服装や軽やかな装いの少年少女たち、あたりにひびく少年少女の声、そういう中において自分は孤独 (alone) だ。

流れの真中に一人の少女がぼつんと静かに (alone and still) 立って、海の方を見ていた。彼女は魔法で不可思議な美しい海の鳥に変えられたものようであった。その長いすんなりとした (long slender) むき出しの脚は鶴のように細っそりとしており、エメラルド色の海草が肉体に押しつけた

刻印のように巻きついているところを除いては真白だった。象牙 (ivory) のように柔らかそうな (soft) 色をした豊かな太股はほとんど腰のところまで露わになっていて、下着の白い縁が柔らかい白い (soft white) 鳥の毛のようにのぞいていた。青磁色のスカートは大胆に腰のあたりまで捲り上げられ、後ろの方で鴿の尾のように垂れていた。その胸も鳥のように柔かくほっそり (soft and slight) としており、黒い羽根の鴿の胸のように細っそりと柔らか (slight and soft) そうだった。しかし、その長い金髪 (long fair hair) はいかにもういういしく、その顔はあどけなく、しかもこの世の美の驚異をもっていた。

彼女は一人で静かに (alone and still) 海の方を眺めていた。やがて彼のいることに気づき、彼の崇拜にみちた眼差しを意識すると、彼の方に視線を移し、静かに彼の疑視に耐えていた。そこには恥らいもなく、淫りがましい態度もなかった。長い間彼の疑視に耐えていたが静かに彼から視線をそらすと、流れに視線をおとし、足で水をあちこちとおだやかにかきまぜはじめた。静かに揺れ動く水のかすかな (faint) 音が、はじめてあたりの静寂を破った。低い、かすかな (faint)、囁くような (whispering) 音、就寝を報らせる鐘のように消え入るような (faint) 音、あちらからこちらへ、こちらからあちらへ、かすかな (faint) 焔が彼女の頬にちらついた。

—ああ、天なる神よ！ スティーヴンの魂は汚らわしい歡喜の迸り出る声を出した。

彼は不意に少女から身をひるがえして、浜の向うへと歩み去った。彼の頬は燃え、全身はほてり、四肢は震えた。前へ、前へ、前へと彼は進んだ。浜を越えて向うへ。海に向かって荒々しく歌い、彼に呼びかけてきた生命の降誕 (the advent of the life that had cried to him) を迎えようと叫んだ。

少女の姿は永遠に彼の魂にはいり込み、いかなる言葉も彼の恍惚とした聖なる静寂 (the holy silence of his ecstasy) を破らなかった。彼女の眼は彼を呼んだ。その呼び声に彼の魂は踊った。生き、あやまちを犯し、墮ち、勝ち、生から生を創造するのだ！ 奔放な天使が彼に現われたのだ、この世の青春と美の天使、人生のけがれなき大庭からの使者 (an envoy from

the fair courts of life) が、一瞬間の恍惚のうちに彼の前に、あやまちと栄光のあらゆる門を押し開いた。進め！ 進め！ 進め！……頂上には広々として無関心な天空 (the vast indifferent dome) と静かに運行する天体を感じ、彼の下では、彼を産みその胸に抱いてくれた大地 (the earth beneath him, the earth that had borne him, had taken him to her breast) があった。

ものうげな眼りを覚えて彼は眼を閉じた。大地とそれを見守る星の広大な循環運動を感じているかのように彼の眼は震えた。何か新しい世界の不思議な光を感じているかのように震えた。彼の魂は気を失って (swooning) 何か新しい世界、海の底のように幻想的ではの暗い世界、雲のような形をしたものが横行する世界に溶けて解体していった⁽³⁰⁾。」

カソリックは一神教原則を厳守する、もち論プロテスタントでも同じである。ところがカソリックの教会堂には、主祭壇の他に、ひときわ目立つマリアの祭壇があったり、他の諸聖人の祭壇があって、マリアとか諸聖人にはそれぞれ祈願に対する加護機能の分担があり、祈りを捧げる人は、主祭壇の前では祈りだけであるが、マリアとか他の聖人の祭壇の前には、種々の奉献物を奉じて、祈願成就の感謝の祈りを奉げるということである。聖書においてはマリアは聖母と呼ばれていない。人間マリアから聖母マリアへの変化は、一つはイエスのあり方 (神の子イエスの肉体の無原罪性はその肉体を準備したマリアの処女性、無原罪性、聖化を強化する必然性をうむ)、もう一つは、地中海地域に一般であった地母神信仰の文化的伝統が大きく作用していると指摘されている。古代ギリシアのエーゲ海文明遺跡には、この母神像が多数出土され、しかもその母神像の脇に、母神よりもはるかに小さい男神が描かれている場合が多く、大母神が処女受胎によって男性の子神を生み、ついでこの母神と男神によってあらゆる生命が生み出されるというモチーフが、そこで示されているということである⁽³¹⁾。

まさに「流れに立つ少女」の場面は、キリスト的、自己創造的芸術家ステューヴンの再生の場面である。それは幼少年時代より「彼に呼びかけてきた生命の降誕」 (the advent of the life that had cried to him) という聖書的表現によって暗示されており、その魂の誕生は、聖母マリア的、地母神

的女性の肉体をかりて誕生するのである。この少女は、子を吸収せんとする死の祭壇が象徴する敵然と変らぬ「父」の世界——「広々として無関心な大空」(the vast indifferent dome)——に対してスティーヴンが選んだ、まちがいと偶然の領域を象徴しており、彼女は大地そのものであり、地上のカオスそのものである。彼女はスティーヴンが幼少年時代に結婚すると宣言したアイリーンであり、彼の愛の言葉を待って鉄道馬車のステップにたたずんでいたE・Cという少女であり、メルセデスであり、ちらちらと燃えるガスの焰の中で彼をはじめてセックスに導いた娼婦であり、スティーヴンが地獄の説教の恐怖のうちに祈りを捧げた聖母マリアでもある。「人生のけがれなき大庭からの使者」(an envoy from the fair courts of life)は聖と俗(the sacred and the profane)を兼備した女神(地母神)とのincestuousな結婚は息子のprofaneな叫びと宗教的かつ官能的陶醉(swooning)のうちに完結する。この高揚せるリリシズムは、『ユリシイズ』におけるincestuousな母への愛着を捨てきれない主人公の挫折感にふれると、アイロニカルなひびきをもたざるをえないと同時に、生がそのまま死であり、死がまた生をあらわすといった人間の根源的テーマが胸に迫ってくるのである。

註

- (1) Stuart Gilbert and Richard Ellman (ed.), *Letters of James Joyce*, 3 vols, Faber, New York, 1957, 1st Vol., p.55.
- (2) 会田雄次, 谷泰共著『世界の宗教2——カトリック』淡交社, 東京, 1969, p.65.
- (3) James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Penguin Modern Classics, 1968, pp. 159-160.
- (4) *Ibid.*, p.158.
- (5) 会田, 谷共著『世界の宗教2——カトリック』前掲書, p. 105.
- (6) 同, p. 137.
- (7) James Joyce, *Dubliners*, The Modern Library, New York, 1926, p.7.
- (8) Joyce, *A Portrait*, op. cit., p.154.
- (9) 名原広三郎, 藤田栄, 村山栄太郎共訳『ユリシイズ』(1), 岩波書店, 1958,

- p. 14.
- (10) Joyce, *A Portrait*, op. cit., pp. 100—101.
 - (11) Joyce, *Dubliners*, op. cit., p.10.
 - (12) 川口喬一著『現代イギリス小説——ジェイムズ・ジョイスを中心に』, 開拓社, 1969, p.160.
 - (13) Joyce, *Dubliners*, op. cit., p.11.
 - (14) Joyce, *A Portrait*, op. cit., pp.161—162.
 - (15) *Ibid.*, p.151.
 - (16) Joyce, *Dubliners*, op. cit., p.14.
 - (17) *Ibid.*, pp.18—19.
 - (18) *Ibid.*, p.17.
 - (19) *Ibid.*, p.16.
 - (20) *Ibid.*, pp.36—38.
 - (21) Joyce, *A Portrait*, op. cit., pp.35—36.
 - (22) *Ibid.*, p.43.
 - (23) Joyce, *Dubliners*, op. cit., pp.35—36.
 - (24) *Ibid.*, p.41.
 - (25) Joyce, *A Portrait*, op. cit., pp.64—65.
 - (26) *Ibid.*, pp.70—71.
 - (27) *Ibid.*, p.105.
 - (28) *Ibid.*, pp.116—117.
 - (29) *Ibid.*, p.149.
 - (30) *Ibid.*, pp.171—173.
 - (31) 会田, 谷共著『世界の宗教2——カトリック』前掲書, pp. 122—138.